



青山紅葉疏

AI和歌翻案漢詩五十首

石倉秀樹 漢詩
中太郎 和歌
金中 編集

目録

第一篇 詠李白心境十七首 1 頁

- (一) 高樓暢飲 (二) 仙海行舟 (三) 良夜抒懷
- (四) 長安柳絮 (五) 鹿鳴紅葉 (六) 雨後紅楓
- (七) 山上孤松 (八) 月下思鄉 (九) 松下待君
- (十) 山中獨酌 (十一) 孤眠望月 (十二) 長安舊夢
- (十三) 貶謫自嘲 (十四) 秋宵落淚 (十五) 醉中嘆老
- (十六) 往事如煙 (十七) 來生漫想

第二篇 詠王維心境十七首 9 頁

- (一) 山居言志 (二) 隱居心喜 (三) 山中過雨
- (四) 天晴漫步 (五) 山徑賦詩 (六) 暮夏晚歸
- (七) 暗夜尋螢 (八) 月下蟬鳴 (九) 山居秋興
- (十) 水村秋夜 (十一) 草庵夜雨 (十二) 雨後訪君
- (十三) 山林觀雪 (十四) 冬日寒鐘 (十五) 山中歲月
- (十六) 梅下飲茶 (十七) 老來酣睡

第三篇 詠愛情故事十六首 18 頁

- (一) 望月思君 (二) 夢裏相思 (三) 思念難禁
- (四) 約會徘徊 (五) 別後憶君 (六) 情書無果
- (七) 苦坐自嘲 (八) 失戀郊遊 (九) 日暮傷情
- (十) 花下感懷 (十一) 老來思念 (十二) 常憶芳顏
- (十三) 渡海尋君 (十四) 終成眷屬 (十五) 黃昏憶舊
- (十六) 日暮相依

跋 「中太郎」の和歌をもとに漢詩に詠んでみて

第一篇 詠李白心境十七首

(一)

高樓暢飲	高樓 <small>ちやういん</small> にて暢飲す
登樓觀美景，	樓に登り 美しき景 <small>み</small> を觀て
飲酒樂浮生。	酒を飲 <small>ちんすい</small> み 浮生を樂しむ
沈醉春宵夢，	沈醉すれば 春宵の夢に
銀河滿地橫。	銀河 地に滿ち横たはる

(中太郎和歌並びに中国語訳)

春の夜の浮き世のほどを眺めつつ眺めかねたるうたた寝
の夢

常观望
春夜芸芸浮世相，
难观小睡梦之乡

(二)

仙海行舟	仙海 <small>や</small> に舟を行る
星光照航路，	星の光 航路を照らし
輕舸進天河。	輕舸 <small>けいか</small> 天河を進む
破浪來瀛海，	浪 <small>なみ</small> を破 <small>えいかい</small> り 瀛海 <small>えいかい</small> に来たれば
仙風拂面多。	仙風 <small>せんふう</small> 面 <small>つら</small> を払 <small>な</small> づること多し

(注) 輕舸：小舟。瀛海：大海。仙風：仙界の風。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

のどか 長閑なる光の道あまや通がはふらむ天すゑの川波末しかぜの潮風

现在正通行于
悠闲的光之路吧？
银河的波浪，最后的海风

(三)

良夜抒懷	良夜 <small>おも</small> に <small>の</small> 懷 <small>の</small> ひを抒 <small>の</small> ぶ
昨夜玩明月，	昨夜は 明月 <small>もてあそ</small> を 玩 <small>び</small> び
今宵醉玉河。	今宵は 玉河 <small>ぎよくが</small> に醉 <small>ふ</small> ぶ
碧天堪詠嘆，	碧天 詠嘆するに堪へたれば
揮翰漫高歌。	翰 <small>ふて</small> を揮 <small>ひ</small> 漫 <small>みだ</small> りに高 <small>うた</small> 歌す

(中太郎和歌並びに中国語訳)

月影くもるの雲居いづくの星もあるものを何處までとて思ふべきかな

月光映照的

云中的星星也有啊!

我该认为何处是终止呢?

(四)

長安柳絮	長安 <small>りうじよ</small> の柳絮
天街停步賞，	天街に 步 <small>と</small> を停 <small>と</small> めて賞 <small>せり</small> せり
風裏柳絲翻。	風裏 <small>かぜ</small> に 柳絲 <small>ひる</small> の翻 <small>が</small> へるを
疑是仙巾舞，	疑ふらくは是れ 仙 <small>わた</small> の巾舞 <small>しげ</small> せるかと
輕揚飛絮繁。	輕く揚 <small>が</small> りて 飛 <small>わた</small> ぶ絮 <small>しげ</small> 繁 <small>し</small> し

(注) 天街：都の街路。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

春ごとに岸の柳の糸見れば柳の種の数ぞ知らるる

每个春天

当我看到岸边的柳丝，

便知道有多少颗柳树的种子

(五)

鹿鳴紅葉	鹿鳴きて紅葉す
白鹿馳神域，	白き鹿 神域を馳せ
金秋嘶太空。	金秋 太空に嘶く
呦呦求配偶，	<small>いろいろ</small> 呦呦と 配偶を求むれば
霜葉染羞紅。	<small>さうえふ</small> 霜葉 染まりて紅を羞づ

(注) 呦呦：鹿の鳴き声。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

かみなび神奈備の紅葉をかけて鳴く鹿の尾上をのへの森は色まさりけり
 披上神圣山林的紅葉，
 有鹿鸣叫的山顶森林
 色彩变深了

(六)

雨後紅楓	雨後の紅楓
幾經秋雨洗，	<small>いく</small> 幾たびか 秋雨の洗ふを経て
紅葉滿山中。	紅葉 山中に満つ
恰似火炎旺，	<small>あたか</small> 恰も似たり 火炎 <small>さかん</small> の旺なるに
熊熊照半空。	<small>あかあか</small> 熊熊と 半空に照るに

(注) 熊熊：光焰の旺盛なる様。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

紅葉する梢の秋の初時雨時雨るる空もなほや染むらむ
 紅葉梢头的
 秋天第一场阵雨，
 阵雨的天空也依然正被染红吧？

(七)

山上孤松	山上 <small>こしょう</small> の孤松
秋來山早霜，	秋来たれば 山に早き霜あり
萬綠化紅黃。	万緑 紅黄 <small>こうわう</small> と化す
風過紛紛散，	風が過 <small>よ</small> ぎれば 紛紛として散り
留松峰頂蒼。	松の 峰頂に蒼きを留む

(中太郎和歌並びに中国語訳)

たかさご おのへ
高砂の尾上の木の葉色添へて降りにし後の峰の松風

高砂山顶的树叶
增添了色彩，
雨后的山峰生起松风

(八)

月下思郷	月下 郷 <small>ふるさと</small> を思ふ
久難歸故郷，	久しく 故郷に帰り難く
望月吊單影。	望めば月は 単影を吊りをり
松樹聳青天，	松の樹は 青天に聳え、
含霜星耿耿。	霜を含みて 星 <small>かうかう</small> は耿耿たり

(注) 耿耿：きらきらと輝く様。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

故郷は帰らぬ月を形見とぞ松さへ霜に結びけるかな

把不返回的月亮
作为故乡的念想，
就连松树也结了霜啊！

(九)

松下待君
山峰松蓋下，
暢想碧天開。
漫漫千年後，
嫦娥駕鶴來。

松の下^{もと}で君を待つ
山の峰 松の蓋^{かさ}の下
暢想す 碧天の開けるを
漫漫たる千年の後
嫦娥 鶴^のに駕りて来たらん

(中太郎和歌並びに中国語訳)

逢ふことは空しきこと^{しるべ}の標 せよ奈良の高嶺の峰の松風
把相会
当作空虚之事的指引吧！
奈良高峰的山峰生起松风

(十)

山中獨酌
蝸廬徹夜聽，
松籟響幽庭。
山月悠然照，
單身抱酒瓶。

山中に獨酌す
蝸廬^{かろ}に 夜を徹して聴く
松籟の 幽庭に響くを
山月 悠然と照り
單身 酒瓶を抱く

(中太郎和歌並びに中国語訳)

あしびきの山の高嶺の松風は我が身一つの家^{いへる}居なりけり
山上高峰的
松风，
便是我孑然一身的住处

(十一)

孤眠望月	<small>ひと</small> 孤り眠り月を望む
山中容客枕，	山中 客枕 <small>い</small> を容る
独占月光明。	独占す 月光の明るきを
夢對嬌娥問：	夢 <small>そうが</small> に嬌娥 <small>そうが</small> に対して問ふ
何由垂淚清？	何に由り 涙の清きを垂らさんやと

(注) 客枕：旅の枕。嬌娥：嫦娥。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

人知れぬ旅寝の床の草枕今宵の月の影ぞ悲しき

在不为人知的
 旅途的卧床上结草做枕，
 今宵的月光多么悲伤

(十二)

長安舊夢	長安 旧夢
常憶帝都春，	常 <small>おも</small> に憶ふ 帝都の春
傷情望暮雲。	情を傷め 暮雲を望む
謫居増酒量，	<small>たくきよ</small> 謫居に 増ゆる酒量
醉夢諫人君。	醉夢に 人君 <small>いさ</small> を諫む

(注) 謫居：流刑の住まい。人君：君主。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

あはれとや思ひしものを慰めて都の夢の春の夕暮

曾经感到过悲哀吗？
 那安慰我的
 都城之梦的春日黄昏

(十三)

貶謫自嘲	<small>へんたく</small> 貶謫され自嘲す
夢醒歸人世，	夢醒めて 人の世に帰り
悲中理想消。	悲しき中に 理想消ゆ
固來才智淺，	<small>もとより</small> 固來 才智淺くも
妄自扮鵬雕。	妄りに自ずから <small>ほうてう</small> 鵬雕に扮す

(注) 貶謫：左遷。鵬雕：遠く高く飛べる大きな鳥。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

醒めてこそ夢もうつつに難かたからめ忘れむ夢はあらしと思へ
 只有醒来时
 才知道梦也难成现实，
 没有一场梦我能忘怀

(十四)

秋宵落淚	秋宵 落淚す
秋宵聽陣雨，	秋の宵に <small>しぐれ</small> 聽く陣雨
淅瀝打寒窗。	<small>せきれき</small> 淅瀝として <small>かんさう</small> 寒窓を打つ
遙想天人淚，	遙かに想ふ 天人の淚
垂悲溢酒缸。	垂れて悲しく <small>さかづき</small> 酒缸に溢る

(注) 陣雨：時雨。淅瀝：輕微なる風雨の音。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

神無月時雨れて降れる夜もすがら窓打つ雨に音ぞ聞こゆる
 旧历十月
 整夜下着阵雨，
 整夜我听到敲窗的雨声

(十五)

醉中嘆老	醉ひの中 老いを嘆く
晚境無前路，	晚境 前路無く
追懷促感傷。	追懷 感傷を促す
凡夫傾酒盞，	凡夫 酒盞を傾け
終老是恆常。	老いを終 ^す ごすは 是れ恆 ^{こうじょう} 常

(注) 追懷：思い出。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

行く末も思ひしことも哀れなる人の習^{なら}ひに墮^おつるなりけり
 无论前途还是追忆，
 我都沦于
 悲哀之人的常态

(十六)

往事如煙	往事 煙の如し
沈吟思往事，	沈吟 ^{ちんぎん} し 思ふ往事は
恰似炭窯煙。	恰も似たり 炭窯 ^{すみがま} の煙に
滾滾飄蒼宇，	滾滾と 蒼宇 ^{ただよ} に飄ひ
花消萬象遷。	花と消え 萬象 ^{うつ} 遷る

(注) 沈吟：低い声でつぶやく。深く思う。蒼宇：青空。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

見^{けぶり}し方も煙に消えぬ炭窯^{すみがま}の深き心はなほ無かりけり
 看到的方向已化烟而逝，
 我依然没有
 像炭窑般深厚的内心

(十七)

來生漫想	來生を漫 <small>おも</small> に想ふ
今生歸死灰，	今生は 死灰に歸し
來世可輪迴？	來世は 輪迴 <small>りんね</small> するも可なりや？
老去唯期盼：	老い去り 唯 <small>ただ</small> に期盼 <small>きふん</small> せり
做花開澗隈。	花と做り 澗隈 <small>な</small> に開かんと

(注) 期盼：期待する。澗隈：谷川の片隅。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

行く末は変はる命も絶えにしを如何いかなるわが身結びおきけ
む

将来
变化的生命也断绝了，
去终结了什么样的我呢？

第二篇 詠王維心境十七首

(一)

山居言志	山に居りて志を言ふ
世人多戀京，	世人は 多 <small>み</small> いに京 <small>みやこ</small> に恋し
我愛山中靜。	我は愛す 山中の静かなるを
春日醉花間，	春日 花間に酔ひ
秋宵吟月影。	秋宵 月影を吟ず

(中太郎和歌並びに中国語訳)

誘たれはれて誰も都を慕ふらむ我がならはしの月の影かな

受人之邀
现在谁都怀念都城吧？
我所习惯的月光啊！

(二)

隱居心喜	隱居して心喜ぶ
厭世山中隱，	世を <small>いと</small> 厭ひ 山中に隠れ
茅廬喜納涼。	茅廬に <small>ばうろ</small> 喜びて納涼す
心魂求飽滿，	心魂 <small>ほうまん</small> 飽滿せるを求め
朝露落池塘。	朝露 池塘に落つ

(注) 茅廬：茅葺の粗末な庵。飽滿：飽きるほどに満足する。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

山深く涼しかりけり世の中をはかなく落つる池の玉水たまみづ
 山深且凉爽，
 水滴从世间
 虚幻地落入池中

(三)

山中過雨	山中を過ぐる雨
驟雨奔馳過，	驟雨 <small>しうう</small> 奔馳 <small>はし</small> せて過ぎ
幽聞滴瀝聲。	幽 <small>かすか</small> に聞く 滴瀝 <small>てきれき</small> の聲
前山雲尚暗，	前山の雲 <small>なほ</small> 尚暗く
遙想碧溪轟。	遙かに想ふ <small>へきけい</small> 碧溪の轟くを

(中太郎和歌並びに中国語訳)

五月雨は軒の滴さみだれにひま見えて夕立かかると山河の水やまがは
 房檐的水滴中
 梅雨显现出空隙，
 驟雨淋上山間的河流

(四)

天晴漫步	天晴れて漫步す
雲開見前路，	雲開き 見えたる前路
九曲入青山。	九曲 <small>きうきよく</small> し 青山に入る
曳杖出茅舍，	杖 <small>ひ</small> を曳 <small>ひ</small> き 茅舍 <small>ぼうしや</small> を出
吟詩鶴歩閑。	詩を吟じ 鶴歩 <small>かくほ</small> すること閑なり

(注) 九曲：曲がりくねる。鶴歩：鶴のように歩む。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

珍けふしく重なる山の道見えて今日のかりいほ庵暮しつるかな
 重叠的山中
 罕见地看见道路，
 我在临时的小屋里度过了今天

(五)

山徑賦詩	山徑に詩を賦す
山徑傳溪響，	山徑 溪響を伝へ
逍遙七歩吟。	逍遙 <small>しちほ</small> 七歩の吟
無人聽好句，	好句を聴く 人無く
酬和與飛禽。	酬和 <small>ひきん</small> す 飛禽と

(注) 七歩吟：曹植は七歩進む間に詩一首を詠んだ。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

山川やまがはの清き流れの浜千鳥おのが心に聞き渡るかな
 山间河水
 清流上的海滨白颈鹤，
 我在心中不住地聆听

(六)

暮夏晚歸	暮夏 晩に歸る
風中聞暗香，	風の中に 暗香を聞き ^か
回看蓮花媚。	回看すれば 蓮の花 媚し ^{うつく}
日暮晚鴉還，	日暮 晚鴉は還り ^{かえ}
吾留尚陶醉。	吾は留まり なほ陶醉す

(注) 暗香：どこからともなく漂ってくる香り。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

風香る萩の花さへ立ち沿ひて我が夕暮ぞなほ残りける

风有馨香
就连胡枝子花也在陪伴，
属我黄昏尚未阑

(七)

暗夜尋螢	暗夜 螢を尋ぬ
綠光清似幻，	緑の光 清くして幻に似
追尾暗溪螢。	追尾す 暗き溪の螢を
歩緩頻迷路，	歩みは緩くも 頻りに路に迷ひ ^{ゆる しき みち}
飄搖舞不停。	飄ひ揺れ 舞ひて停まず ^や

(中太郎和歌並びに中国語訳)

濁りなき光をのみと思ふには何に喩へて行く螢かな

为了只想象为
没有污浊的光芒，
何以来比喻行去的萤火虫？

(八)

月下蟬鳴	月下に蟬鳴く
山林沈暗夜，	山林 暗夜に沈み
月鏡破雲昇。	月鏡 雲を破りて昇る
忽覺蟬聲起，	忽ち覺ゆ ^{たちま} 蟬の聲の起つを
清光更皎澄。	清光 更に皎く澄む ^{しろ}

(注) 月鏡：月。清光：月光。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

あしびきの山の林の梢より蟬の諸^{もろごと}聲澄める月影

从山林的
树梢传来：
蝉声齐鸣、清澈月光

(九)

山居秋興	山居秋興
幽居山里庵，	幽居 山里の庵
賞月酒方酣。	月を賞するに 酒 方に 酣 ^{まさ たけなは} なり
秋露如星閃，	秋露 星の閃く如く
蛩聲聞兩三。	蛩聲 聞こゆること兩三

(中太郎和歌並びに中国語訳)

一人住む山田^{いほ}の庵の秋の月露を結べる衣うつなり

独自居住的
山田茅舍的秋月，
传来捣衣声——衣上凝结着露水

(十)

水村秋夜	水村の秋夜
波平蘆葦靜，	波は平らかに 蘆葦は静かに
月照水村秋。	月は照らす 水村の秋
鷗鷺耽清夢，	鷗鷺 清夢に耽り
漁翁曳釣舟。	漁翁 釣り舟を曳く

(注) 鷗鷺：カモメと鷺。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

秋の夜を如何に頼まむ久方の海人の釣り舟如何に曳くらむ
怎样指望秋夜？
现在怎样来
拉动渔夫的钓舟？

(十一)

草庵夜雨	草庵夜雨
狂風終夜雨，	狂風 終夜の雨
不懼毀茅廬。	懼れず 茅廬の毀たるるは
但有明朝嘆：	但有り 明朝の嘆き
青山紅葉疏。	青山 紅葉 疏となれり

(中太郎和歌並びに中国語訳)

紅葉散る山の嵐のいたづらに紅葉のみこそ知られざりけれ
红叶飘落
在山上烈风的恶作剧中，
只有红叶无从知晓

(十二)

雨後訪君	雨後 君を訪ぬ
深秋停陣雨，	深秋 ^{しぐれや} 陣雨停むも
山頂見雲飄。	山の頂 ^{いただき} に 雲の飄 ^{ただよ} ふを見る
能否乘雲訪？	能ふや否や 雲に乗りて訪ぬれば
待君揮手招。	君が手を 揮ひて招くを待つは

(中太郎和歌並びに中国語訳)

神無月時雨^{しぐ}るる山に雲消えて誘はれてこそ問ふべかりけれ

旧历十月

下着阵雨的的山上云彩消失，
只有受到邀请才可以去访问

(十三)

山林觀雪	山林に雪を觀る
山中隱茅舍，	山中 ^{ぼうしや} 茅舍に隠れ
溪水繞松林。	溪水 松林を繞る
賞雪消長日，	雪を賞し 長き日 ^{すご} を消し
吟詩養素心。	詩を吟じ 素心を養ふ

(注) 茅舍：茅葺の粗末な家。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

山里^{あした}の朝の原の柴^{いほ}の庵古き滴^{しづく}に雪はふりつつ

山村

黎明平原的柴庵，
雪花不住地落到陈旧的水滴上

(十四)

冬日寒鐘	冬日の寒鐘
深冬草木枯，	深冬 草木枯れ
旭日藏清夢。	旭日 <small>きよくじつ</small> 清夢を蔵す
臥炕見窗氷，	<small>こう</small> 炕に臥して 見れば窓に氷
鐘聲也封凍。	鐘の聲も也 <small>ま</small> 封凍す <small>ふうとう</small>

(注) 煦日：暖かい日。炕：ここではオンドル。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

冬枯れの朝あしたの原になりにはけり鐘の響きもなほ凍るらむ
 冬季
 黎明的平原草木枯萎，
 现在钟声也依然冰冻着吧？

(十五)

山中歲月	山中の歲月
晚秋風雨掃，	晚秋 風雨は掃く
落葉山中老。	落葉の 山中に老ゆるを
歲暮雪花飛，	<small>さいぼ</small> 歲暮 雪花飛び
梅枝含玉早。	梅の枝 玉を含むこと早し

(注) 歲暮：年の暮れ。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

み吉野の峰の嵐は絶え絶えに山の葉埋む年の暮うづかな
 吉野山峰的烈风
 变得断断续续，
 山叶将岁暮掩埋

(十六)

梅下飲茶
嚴冬枝上雪，
春到化梅花。
綴玉流香氣，
清姿伴品茶。

梅もとの下にて茶を飲む
嚴冬 枝上の雪
春到れば 梅花と化す
玉を綴り 香氣を流し
清姿 品茶を伴ふ

(中太郎和歌並びに中国語訳)

晴れぬ間の梢にかかる白雪をいかに見せばや秋萩の花

未放晴時

挂在树梢的白雪，

多么想让秋天的胡枝子花看到！

(十七)

老來酣睡
終老送斜暉，
通宵忘是非。
綿綿耽睡美，
蝶夢枕頭飛。

老い来たりて酣睡す
老いを終すごすに 斜暉を送り
通宵 是非を忘る
綿綿と 睡ねむりの美うまきに耽れば
蝶夢 枕頭に飛ぶ

(中太郎和歌並びに中国語訳)

よもすがら入日ながらになりけり思ひも休む和歌の浦浪うらなみ

終夜

落日原封不动，

和歌海岸的波涛将思虑也休憩

第三篇 詠愛情故事十六首

(一)

望月思君	月を望み君を思ふ
仰望嬋娟美，	仰ぎ望めば <small>せんげん</small> 嬋娟美しく
金波入懷裏。	金波 <small>ふところ</small> 懷裏に入る
思君倩影時，	君の倩影 <small>せんえい</small> を思ふ時
心底春風起。	心の底に 春風 <small>た</small> 起つ

(注) 嬋娟：月。金波：月光。倩影：美しい姿。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

眺めやる月の光に影添へて心のうちに秋風ぞ吹く
极目远眺
月光中带着阴影，
秋风在我心中吹送

(二)

夢裏相思	夢裏 <small>ゆめ</small> に相ひ思ふ
愁眠萬種思，	愁眠 <small>しうみん</small> に 萬種 <small>よろず</small> の思ひあり
夢裏寫情詩。	夢裏 <small>ゆめ</small> に 情詩 <small>しる</small> を寫す
筆底花容笑，	筆底 <small>ひつてい</small> に 花容 <small>え</small> 笑み
傾心託我時。	心を傾け 我に託す時

(注) 愁眠：さびしい眠り。情詩：恋愛の詩。
花容：花のかんばせ。筆底：筆先。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

うき寝して思ひもまさる吾妹子わぎもこが人の心を頼みやはせし
片时云雨之后
我的娘子思慮亦增，
她还能指望人心吗？

(三)

思念難禁	思念 禁じ難し
思君欲相見，	君を思ひ 相 ^あ ひ見はんと欲すれば
如鹿躍胸襟。	鹿 胸襟 ^{おど} に躍るが如し
爲鎮無邊亂，	^{はて} 辺無く乱るるを鎮めんが為に
長宵漫撫琴。	長宵 ^{そぞろ} 漫に琴を撫づ

(中太郎和歌並びに中国語訳)

相見むと思ふ心も慰まず人の心の静かなりけり
 期待相见
 我的心无法排遣，
 而那人的心多么安静

(四)

約會徘徊	会ふを約して徘徊す
苦候君幽會，	苦しみ候 ^ま つ 君との幽会
搔頭立不安。	頭を搔き 立ちて不安なり
但聞黄雀囀，	^{ただ} 但に聞く ^{すずめ} 黄雀の囀り
日暮遠鐘寒。	日暮 遠鐘寒し

(注) 幽會：デート。遠鐘：遠くの鐘の音。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

思ひやれ誰れをもここに待ちわびて入相^{いりあひ}の鐘鳴く鶯の
 请想想吧！
 是谁在这里焦急地等待？
 黄莺鸣叫着晚钟

(五)

別後憶君	別れし後に君を憶 ^{おも} ふ
分手送君歸，	手を分かち 君の歸るを送れば
心頭總相憶：	心頭には 総 ^{なべ} て相 ^{おも} ひ憶 ^{おも} ふのみ
花間君淺笑，	花間に 君は淺く笑み
爛漫添春色。	爛漫として 春色を添へり

(注) 分手：別れる。淺笑：微笑む。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

花を待つもとの心をしるべにてあくがれそむる春のわかれば

将等待花朵的初心
当作指引，
春日的别离开始吸引我

(六)

情書無果	情書に果 ^{こうか} 無し
相思期再逢，	相 ^{みだ} ひ思 ^か ひ 再び逢ふを期し
漫寫情書美。	漫りに写く 情書 ^{さんび} の美しきを
廢寢手酸疲，	寝るを廢せば 手は酸疲
君心如死水。	君の心は 死水の如し

(注) 情書：ラブレター。酸疲：だるく疲れる。
死水：静まり返り、長く変化しない水。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

相見むと思ふ心も慰まず人の心の静かなりけり

期待相见
我的心无法排遣，
而那人的心多么安静

(七)

苦坐自嘲	苦坐し自嘲す
苦吟無妙想，	苦吟に 妙想無く
落寞坐黄昏。	落莫 ^{らくぼく} として 黄昏に坐す
桌上斜暉照，	卓 ^{つくえ} の上に 斜暉照り
廢箋留墨痕。	廢箋 墨痕を留む

(注) 落寞：がっかりする。寂しい。斜暉：夕陽。廢箋：ほご紙。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

等閑^{なほざり}の言の葉だにも朽ち果てていかなる方を恋しかるらむ

就连等闲的言语
也彻底腐朽，
我在爱恋着什么样的人呢？

(八)

失戀郊遊	失戀 ^{こうゆう} し郊遊す
寂寞求安慰，	寂寞として 安慰 ^{なぐさめ} を求め
徘徊湖水邊。	徘徊す 湖水の辺 ^{あた} りを
風輕雲雅靜，	風輕く 雲は雅 ^{みや} びで静かなるも
清淚落依然。	清き淚 落つること依然たり

(注) 郊遊：郊外に行く。安慰：慰め。依然：もとのまま。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

旅衣^{たびごろも}思ひ乱れて袖濡れて落つる涙や乾く間もなし

身穿行旅衣装
我思绪烦乱，衣袖浸湿，
从无落泪变干时

(九)

日暮傷情
袖間清淚垂，
水面片雲飛。
何日君知我？
傷心對落暉。

日暮に情を傷む
袖そで間に 清き涙垂れ
水面みなもに 片雲へんうん飛ぶ
何いつの日か 君知らん 我の
心いたを傷め 落暉らくきに対するを

(注) 片雲：ちぎれ雲。落暉：夕陽。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

なみだがは
涙河 忘れぬ袖を濡らすかな 恋しき人を知る人の無き
泪河
沾湿难以忘怀的衣袖，
我所爱恋的人无人知晓

(十)

花下感懷
櫻花開正艷，
如雪隨風舞。
去歲伴君遊，
今春恨孤苦。

花下の感懷
櫻花 開あてきて正に艷やかに
雪の 風に随ひ舞ふ如し
去きよさい歳 君を伴ひて遊び
今春 孤苦を恨む。

(注) 去歳：去年。孤苦：独り身の辛さ。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

さくらばな
桜花 乱れてにほふ 桜花 思ひいでても怨みつるかな
櫻花
乱放的櫻花！
就算不想起，我也含恨

(十一)

老來思念	老 ^ま い ^ま たりて思 ^{おも} い ^も 念 ^も ず
老來彌想見，	老 ^ま い ^ま たり 彌 ^{ますま} 想 ^{おも} 見 ^も ふ
初戀玉人妍。	初 ^{はつ} 戀 ^{こひ} の 玉 ^{たま} 人の ^{ひと} 妍 ^{げん} なるを
萬物皆生變，	萬 ^ま 物 ^{ぶつ} 皆 ^{みな} 生 ^な じ ^ん 變 ^{へん} ずるも
舊情猶保鮮。	舊 ^{ふる} 情 ^{こころ} 猶 ^{なほ} 鮮 ^{せん} を保 ^{たも} つ

(中太郎和歌並びに中国語訳)

長らへてしばしも逢はむ憂きものを恋ふる心を忘れやはする

生命延续，片刻也要相逢，
我的心爱上轻浮之人
岂能忘怀？

(十二)

常憶芳顔	常 ^{とこ} に ^に 芳 ^{かほ} 顔 ^{かほ} を ^を 憶 ^{おも} ふ
我心猶盼望：	我 ^{わが} が ^が 心 ^{こころ} 猶 ^{なほ} 盼 ^{ぼん} 望 ^{ぼう} す
君笑眼前來。	君 ^{きみ} 笑 ^え み 眼 ^{まへ} 前 ^{まへ} に ^に 來 ^き たるを
料得多年後，	料 ^{はか} り ^り 得 ^え たり 多 ^た 年 ^{ねん} の ^の 後 ^ご
玉容消瘦哀。	玉 ^{たま} 容 ^{かほ} 消 ^{せう} 瘦 ^{そう} して ^{して} 哀 ^{あは} し ^し からんと

(注) 盼望：切望すること。消瘦：やせ細る。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

我が心待ちしままなる面影にただ面影も留まらざりけり

我的心
始终等待的面容之中，
就连那面容也没留下

(十三)

渡海尋君	海を渡り君を尋ぬ
思君不畏遠，	君を思へば 遠きも畏れず ^{おそ}
搖櫓力行舟。	櫓を揺らし 力めて舟を行る ^{つと}
長夜無明月，	長き夜に 明月無く
風來帶浪愁。	風來たり 浪を帯びて愁ふ

(注) 行舟：舟を進める。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

遙かなる程も忘れ君がため長き夜ながら渡る舟人^{ふなびと}
忘记了遥远的航程，
为了你
我在漫漫长夜做了渡水的船夫

(十四)

終成眷屬	終に眷屬と成る ^{つひ}
相會皆如意，	相ひ会ふに 皆て意の如く ^{すべ}
婚來樂每天。	婚來 每天を楽しむ
白頭偕老處，	白頭 偕に老ゆるところ ^{とも}
餘命尚連綿。	余命 なほ連綿たり

(注) 婚來：結婚して以来。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

逢ふことの心のままになりぬべし今日も命は絶えじとぞ
見る
相会
定能随心所欲，
看到我的生命今天也不会断绝

(十五)

黄昏憶舊	黄昏 <small>おも</small> に旧を憶ふ
翁媪蕩遊船，	<small>をうあう</small> 翁媪 遊船 <small>ゆ</small> に蕩れ
黄昏光欲滅。	黄昏 光は滅 <small>き</small> えんとす
仰天懷往時，	天を仰 <small>なつか</small> ぎ 懷しむは往時の
海誓山盟月。	<small>かいせいさんめい</small> 海誓山盟の月

(注) 海誓山盟：男女が永遠の愛を誓うこと。

(中太郎和歌並びに中国語訳)

水の上光ばかりは朽ちにけり同じ契りの月を見るかな

在水上

只有光腐朽了，

我看着那同一个盟誓的月亮

(十六)

日暮相依	日暮 相ひ依る
白日盡光輝，	白日 光輝を尽くし
丹霞染四圍。	丹霞 四圍を染む
倚肩翁媪坐，	肩 <small>よ</small> を倚 <small>をうあう</small> せ 翁媪坐り
攜手願同歸。	手 <small>とも</small> を携へ 同に歸るを願ふ

(中太郎和歌並びに中国語訳)

夕暮れの心尽くしの夕暮れの心尽くしの同じ夕暮れ

黄昏的

令人千思百虑的黄昏的，

令人千思百虑的同一个黄昏

跋 「中太郎」の和歌をもとに漢詩に詠んでみて

石倉秀樹

西安交通大学外国語学院の中日詩歌研究所の金中博士は、同所が開発した人工知能「阿倍中太郎」（以下、中太郎）が詠んだ和歌一万首ほどのなかの秀歌、あるいは注目すべき歌を百首選び、中国語訳を添えて、歌集『霜の音』として編纂した。この冊子『青山紅葉疏』（青山紅葉 疏となれり）は、その姉妹篇であり、「中太郎」の和歌をもとに私が詠んだ漢詩（五言絶句）五百首余のなかから、金中博士が五十首を選び、編纂してくれたものである。

金中博士は拙作編纂の柱として、三つのテーマを立ててくれている。1「李白の心境に通じる作品」、2「王維の心境に通じる作品」、3「愛情をめぐる作品」の三つである。拙作が大詩人李白や王維に比定されていることは大変光栄であり、とてもうれしい。また、愛情あるいは恋愛は、唐宋の詩人はあまり詠むことがなく、現代の日本の漢詩人もあまり詠まない詩題である。私は、日本の漢詩人は擬古に走りがちだと考えており、夫婦の愛情あるいは男女の恋愛を積極的に詠むことで新しい詩境を開きたいと思っている。「中太郎」の和歌をもとに詠んだ拙作が、愛をめぐる作品となり、金中博士の注目を浴びることができたことは、とてもうれしい。

AI が詠んだ和歌をもとに漢詩を詠むという試みの経緯については、『霜の音』記載の金中博士の『和歌 AI の誕生と意義』および拙文『AI「中太郎」の和歌の魅力』をお読みいただきたいが、私にとっては、AI は私の創作活動の役に立つかどうかを確かめてみたい、という目的があった。もちろん役に立ちそうだという展望があったから私は筆をとったが、創作活動の役に立つかどうかという点では『霜の音』に収録された百首だけではもの足りず、金中博士が「中太郎」和歌一万首ほどのなかから、見どころがありそうだと一端は選びつつも『霜の音』には収録しなかった四百余首についても、五言絶句を詠んでみることにした。合計五百余首、そのなかの佳作五十首がこの『青山紅葉疏』である。その出来映えについては読者の評価に委ねるが、私の六万首余に及ぶ作品がいずれ消え去るものであるとしても、最後まで残るのはこの『青山紅葉疏』の五十首であると思う。

人間は自分の思いを人に伝えるために言葉を使う。詩人もおおむね同様に、作者の思いを作品を通じ読者に伝えようとして言葉を使う。しかし、詩では、特に二十世紀以降の詩では、言葉が秘める表現の可能性を掘り起こす実験的な作詩が行われてきた。そこでは、詩人個人の経験が生む詩情ではなく、言葉そのものが生む新しい詩情を創造することが追求されている。詩情が先か、言葉が先か、という見方に立てば、二十万首近くに上る和歌の言葉を最新のコンピュータ技術によって学習した「中太郎」の和歌は、二十世紀の実験的な作詩と同様に、言葉が先、詩情が後という立場で詠まれている。人間のように詩情のもととなる個人的な経験がないのだから当然といえば当然だが、「やまと言葉」という日本のみやびな古語用いつつ、古典の歴史に沈みつつある和歌に新しい息を吹き込み、古人が詠み得なかった詩情を現代に蘇らせようとしているように思える。そこが新しい。

言葉に先立つものとして作者の詩情を重視する文学観のもとでは、作者は自身の経験や固定観念に縛られ、作者の現在のありように拘束されがちになる。しかし、言葉そのものに詩情を生み出す力があるという考えのもとでその可能性を追求する試みは、それらの束縛から解き放たれ、文学の未来を開く力があると思える。

しかし、詩情が先にあって言葉がそれに寄り添うのではなく、言葉が先にあって言葉が詩情を生むと言う詩空間では、期待した新しい詩情を生み出せないという失敗もある。人間の経験や固定観念から解放された言葉は、自由奔放、縦横無尽であり過ぎるために、読者の理解を超える作品を生み出すことになる。それを失敗とみるか、読者の理解力の不足とみるかはともかく、言葉そのものの力を重視する詩空間では、人智を超える飛躍や意味不明の句が少なからず生まれ、読者を悩ませることになる。

「中太郎」の和歌もまた然り、多くの人が親しめる一万首に一首の秀歌を求めるのであれば、「中太郎」に十数分呻吟してもらえればよいのだが、残りの九千九百余首には、読者がよほど努力しなければ歌意を味読できない、という作品も少なくない。しかし、「中太郎」の和歌をもとに漢詩を詠もうという立場からは、措辞の大胆な飛躍が若干の瑕となって読者の味読を妨げている作品の方が、その瑕はどうすれば補修できるかということで、漢詩の創作意欲をかき立て

てくれた。「中太郎」の和歌の瑕の補修、それは、私の味読能力が不足しているために瑕と思えただけのことであり、それをもとに漢詩を詠むことは、「中太郎」の和歌を私が納得できる形に改竄することに他ならない。つまりは、我田引水。「中太郎」の和歌を我田引水的に味読することで、私は、「中太郎」から多くの作詩のヒントをもらい、私の個人的な経験や固定観念のなかでは到底詠むことはできなかった詩境で、詩を新たに詠むことができた。AI 和歌は私の漢詩創作の役に立った。

日本では文武両道ということがよく言われる。しかし、日本の文人にとっての文武とは何であるのだろうか。日本の文人たちは、文武両道はよしとしつつも、文理は別道と考えているのではないだろうか。理系の学問が新しい知見をもとに科学技術の未来を開拓しているのに対し、文系の学問、とりわけ文学に関わる知見は、文学のどのような未来を展望できているのだろうか。「中太郎」は、日本の古典という「文」と、最新の AI 技術という「理」が生んだ文理両道の歌人といえる。

そして、その歌人が中国で生まれたことに、私たちはどのような文学の未来を展望したらよいのだろうか。私が思うことのひとつに、文学は AI という理とともに文理両道を進むことで、文学の国境を超えることができるのではないかと、ということがある。音楽やスポーツには国境はないが、言葉には壁がある、そこで文学には国境がある。日本人は、中国から学んだ漢字のおかげで、千年の長きを越えて漢詩を詠み続けてきた。一方、中国では、日本語の詩歌が詠まれるということはこれまでほとんどなかった。そうしたなかで、「中太郎」がとても多くの日本語の和歌を詠んでくれたことは、日中の文学の交流のうえで画期的なことである。和歌を詠む AI の開発という形であれ、日本の詩歌の粹ともいえる和歌が、中国で着目されていることは、日本人としてとても喜ばしい。「中太郎」の和歌に日本の歌人や詩人、さらには多く学者や文化人が広く関心を抱き、批評や助言を通じ、中国の和歌・短歌作りの発展に寄与してくれればと切に願ってやまない。

2022年9月29日 日中国交正常化50周年記念日
於東京自宅

石倉秀樹 詩號 鮫鯨

1946年生，東京大學文學部法國文學專業畢業，原日本放送協會（NHK）職員。

葛飾吟社『梨雲』編集人，国際俳句誌『吟遊』同人，
NPO 世界俳句協会会員，短歌文芸誌『ばにあ』会員。

1997年開始作詩，作詩數62000首（詩詞35000首，漢俳等現代短詩27000首）。

1946年生、東京大学文学部フランス語フランス文学専修課程卒、もと日本放送協会（NHK）職員。

葛飾吟社『梨雲』編集人、国際俳句誌『吟遊』同人、
NPO 世界俳句協会会員、短歌文芸誌『ばにあ』会員。

1997作詩開始、作詩数62000首（詩詞35000首、漢俳等現代短詩27000首）。

ブログ『獅子鮫鯨詩詞』

<https://shiciankou.seesaa.net/>

ホームページ『漢詩六万首』

<http://sa44shici.huuryuu.com/>



青山紅葉疏

AI 和歌翻案漢詩絕句五十首

漢詩：石倉秀樹

和歌：中太郎

編集：金中

題字：周兪林

表紙デザイン：譚景之

葛飾吟社

葛飾吟社機関誌『梨雲』2022年10月号 No.180

日中国交正常化50周年特集 別冊

2022年10月1日 第1版発行

ISSN 2185-8233